

New bird flu cases revive fears of human

pandemic Los Angeles Times, CA (米国) 新規鳥インフル事例の発生は、人におけるパンデミック発生の脅威を蘇らせる一予測が難しい H5N1 ウイルスの今後 2009/1/4

2009年には鳥インフルを心配する必要がないだろうと思っていた矢先、香港で6年ぶりに致死性 H5N1 鳥インフルウイルスが再興し、人でのパンデミックの脅威が過ぎ去っていないことを警告された。

インド、バングラデシュ、ベトナム、中国本土でも同じように新規鳥インフルが家きんの間で12月に発生した。同じ時期(11月から12月にかけて: 訳者)、新規人発病者が、エジプト、カンボジア、インドネシアでWHOに報告された。エジプトの16歳少女とインドネシアの2歳少女は死亡した。

この2年間人での発病数と発生する国の数は減っている中で新規事例の発生であった。

国連は10月に、多くの国での監視態勢の強化と感染家きんの迅速な殺処分が、ウイルスの封じ込めと発生の防止につながっていると、その努力を評価していた。

それでも、H5N1 ウイルスは、2003年に発生し始めて以来、非常に弱いながらもくすぶり続け、しかし何回も燃え上がっていた。ミネアポリスの”ミネソタ大学感染症研究と対策”センター長のマイケル・T・オステルホルム氏が語っている。

昨年末の発生事例は、H5N1 ウイルスが存在する限り、状況は簡単に変化するという警告を発している。そのようにオステルホルム氏や他の研究者達が語っている。

「私が感じる不安は、我々の感覚の中で**パンデミック対策疲労**が起きていることだ」、とオステルホルム氏は警告を発する。

H5N1 ウイルスは既にアジアの農家の間に大被害を及ぼしている。公衆衛生当局の推定では、5億羽の家きんが感染死、または殺処分され、巨大な経済的損失と食料不足を起こしている。

しかし、より大きな不安は、H5N1 ウイルスが変異して、1918年の世界で5000万人を犠牲にした、いわゆるスペイン・インフルエンザのようなパンデミックを起こすことである。

H5N1 が鶏から初めて人に感染したのは1997年の香港であり、その際は18人が発病し、6人が死亡している。この事件は世界中に大惨事発生への不安をもたらした。このとき香港は、約160万羽の家きんを3日間で殺処分して、ウイルスを完全に封じ込めた。

その後の家きんにおける発生は2003年の韓国で見られ、そこから、アジア、アフリカ、ヨーロッパ61ヶ国に広がった。

人におけるパンデミックを起こすためには、ウイルスが人に感染するようになり、さらに人々感染を生じるようになる必要がある。現在発生している H5N1 ウイルスは、両方の能力を獲得していない。

2003年の発生以来、確認された人での発病者数は391人で、そのうち247人が死亡している。

2006年に発病者数はピークを迎え115人となり、そのうち79人が死亡していた。その後人での発病者数は2008年には40人、死者数は30人と減少したことが12月中旬にWHOから発表された。

ほとんどの人での発病者は家きんとの直接的接触が原因と見なされ、それは多くの家きんが放し飼いされ、その取り扱いも感染予防用の手袋やマスクを着用しない東南アジアで多く見られてきた。少数の人人感染の発生も疑われている。

発病した近隣者の看病で濃厚に接触した場合である。

しかしウイルスが家きんの間で感染を続けている限り、変異して人に感染しやすくなる危険性は残っている。国連報告ではそのように伝えている。

先月の香港の家きんにおける発生は重要な出来事である。なぜならば、香港政府は H5N1 ウイルスは 2003 年以来、地域内から排除されていたと考えてきたからである。その年(2003年)から香港行政政府は家きんに対するワクチン接種と、厳重な法的に規定した農場の衛生管理を実行してきた。

60羽が死亡した1農場での最新の発生後、行政府は2大農場で8万羽の殺処分を指示した。感染源の調査と、2003年以来、鶏、アヒル、そしてガチョウに、H5N1 ウイルス感染予防のために接種してきたワクチンの効果も検討されている。

香港では、数系統の鳥インフルウイルスに効果を示すワクチンを使っている。しかし研究者の中には、H5N1 ウイルスが、ワクチンが無効な株に変異する可能性を指摘する声もある。インフルエンザウイルスは常に変異し続けている。そのため人の季節性インフルエンザに対するワクチンが、毎年作製しなおされる必要があるのだと、UCLAの疫学と環境衛生科学の教授であるスコット・P・レーン氏が説明している。

中国本土では H5N1 用に開発された新しいワクチンを使っている。しかし中国も、さらにベトナムでも、ワクチン接種により完全に鳥インフル発生は抑え切れてはいない。

メンフィスの聖ユダ小児研究病院のウイルス学者で鳥インフル専門家のロバート・ウェブスター氏によると、ワクチンそのものが問題かも知れな

いとされる。

ワクチンはウイルスの制御が出来なくなった地域に限定して使うべきであり、またそれは一時的な使用にとどめるべきと、同氏は説明する。その理由は、継続的にワクチンを使用し続けることで、ワクチンに耐性の出来た変異株が生じる可能性があるからである。

発生国の中には、ウイルス排除は感染した家きん集団の殺処分でのみ行っている国も多い。それらの国の代表である日本、韓国、マレーシアは H5N1 ウイルスは存在していないと、WHO では考えている。

しかし、商業農場に比較すると対策を講じることが困難な放し飼いで家きんが多い、インドネシア、中国のある地域、エジプト、及び他の国々では、ウイルスが土着化してしまっている。国連のFAO(国連食糧農業機関)はそのように説明している。

鳥インフルエンザウイルスは鳥の間に一般的に存在するものであるが、1918年のウイルスや H5N1 ウイルスのような高病原性株は希である。

研究者達は、今後どのように H5N1 ウイルスが変異してゆくか、これまでの経験から推し量ることが出来ないでいる。

しかしウェブスター氏は警告する。

「このウイルスが極めて危険な性格を保有する株として、我々は未だ対処する必要はあるのだ」